

ジュラルミン色の空

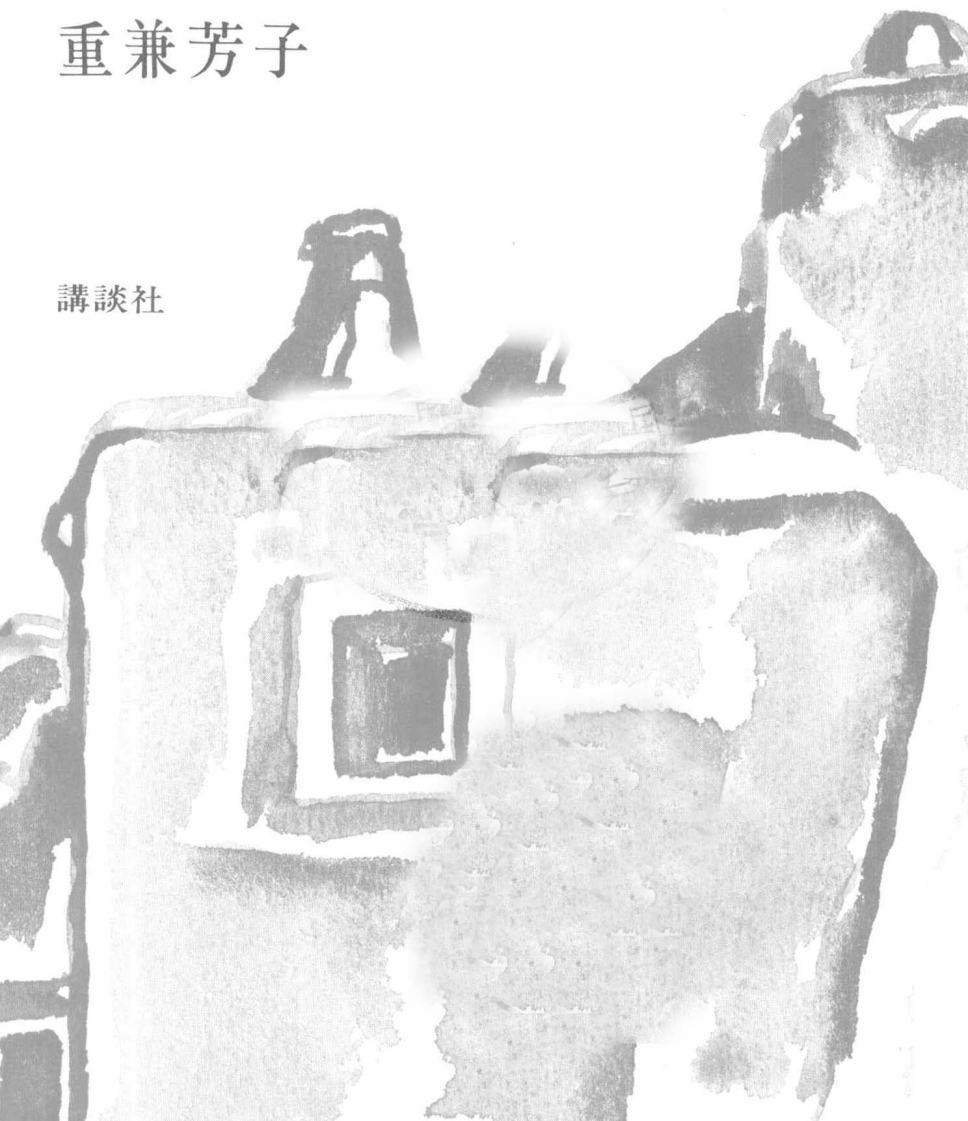
重兼芳子



／色の空

重兼芳子

講談社



ジュラルミン色の空

昭和五十六年二月十日 第一刷発行

著者——重兼芳子

© Yoshiko Shigekane 1981, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三

電話東京三—四三—二二(大代表) 振替東京八—五三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社

製本所——株式会社堅省堂

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

著者略歴

昭和二年北海道に生れる。
五十四年七月、「やまあいの煙」で芥川賞受賞。著書に『透けた耳朶』『やまあいの煙』『うすい貝殻』がある。

ジュラルミン色の空

装画 装幀
坂倉新平 山岸義明

1

京子は叫びにならない小さな声を挙げた。

「火が見える。火が見える。」

友一は指の動きを止めて、両腕の中に京子をくるみこんだ。腕の長い友一に抱かれると、背中につぶりと腕の量感が感じられて、京子は安心して背中を反らす。いくら強く反らせても友一の腕はほどけることがない。どんなに豪華な椅子でも、友一の腕に勝る背もたれはないだろう。京子は安心して背もたれに全身を預けてしばらく眠る。そのままの姿勢でそうと眼覚める。

友一ははじめからおわりまで、全く息を弾ませないままだ。京子の体が反応するのを静か

に眺めて楽しみ、終りを見届けてから体を起す。

夜遅く友一は坂を降って帰って行く。京子が住んでいるアパートは坂の上にある。坂を降りてしばらく行くと新宿西口に近い京子の店がある。友一は京子の店の前を通り過ぎ、大きなガードを潜って、そのずうっと向うの街に帰る。京子をアパートに残して一人で帰る。

たくさんの街並のはずれの方に、友一の妻と娘が住んでいる。妻と娘は京子ほど友一を必要とはしていないようだ。けれども家庭という形式を整えるためのメンバーとして、友一が帰るのを待っている。寝泊りする場所を少しだけ空けている。

友一は次の土曜日に京子のもとに来るまで、体一つ分ほどの場所しかないところに、寝泊りするために帰って行く。

京子は坂の上に立って、友一が帰って行くのをいつまでも見送っている。街灯が途切れると友一の姿が闇に紛れ、街灯に近づくと浮び上る。友一の体が少しずつ小さくなってゆき、やがて頭だけになって視界から消える。

京子が友一を最初に見たのは、うしろ姿であった。

京子の店は手伝いの信子と、調理師見習いの留と三人でやっている。店をはじめたときは京子一人でなにかも取り仕切っていた。客の前では愛想笑いをしてみせるが、内心では髪

を振り乱して歯を食いしばりという感じだった。一時期が過ぎると常連の客もつき、店を続けてゆくことも覚えた。手伝いとして雇った信子が、骨惜みせずよく働いてくれる。小遣い程度の給料でよいからと、食住付きで置いた留が、今では仕込みを任せられるほどになった。

ようやく経営も安定し、それまで張りつめていた京子の気持が、ほっとゆるむときがあった。特に店が休みになる日曜日など、午前中いっぱいを寝て過すと午後の静かな時間を持て余すことがある。持て余しながら、この大切な時間を商売ではない、他のことに使いたくなつた。働くことしか知らない京子は、自分のためだけに時間をどう使つてよいのか、うろたえるばかりで分らないのだった。

区の広報紙が新聞の間に挟んであつて、「日曜日の午後、みんなで歌を唱いましょう」と大きな見出しが出ていた。成人学級の一つとして区が力を入れている事業らしい。余暇の使い方が分らなくて、京子のようにうろろと時間を過している勤め人が、かなりたくさんいるのだろうか。その他の見出しにも「万葉集を読みましょう」とか、「区の文化財を見て歩きましょう」などとあつた。

新聞には七十年安保のデモの記事や、学生が騒ぎを起したショッキングな写真ばかりがつている。その新聞の間に挟まれた、小さな広報紙だから、京子は心をひかれたのかもしれない。

ない。「歌を唱いましょう」というなげない呼びかけが、京子を強くひきつけた。

京子は小学校のときから音楽の時間が最も好きだったし成績も好い。退屈な日曜日の午後なら出かけてみてもいいという気になった。区の補助で会費は無料であり歌なんか一度も唱ったことがなくても歓迎だとあるのが、重い腰を上げる理由にもなった。

日曜日の二時に区民会館に行ってみると、鼠色のくたびれた背広を着た男が一人でピアノを弾いている。そのうしろ姿も疲れた感じだ。その部屋には誰もいずに、うしろの壁際に折り畳みの椅子が積み上げてあるだけだ。

男の髪はまっしろで左右の肩が歪んでいる、左の方が斜に落ちこんでいるので、椅子に腰掛けた上体が左に傾いている。低い方の鍵盤に手をやるときは、傾いた体をずらすように左に少し体を振る。店にくる客の中に同じような体形の男がいた。胸郭成形の手術をして肋骨を何本か抜き取ったと言っていた。

ピアノから流れ出る曲に京子は聞き惚れていた。なんの曲かは分らないが鍵盤を叩きつけるのではなく、さするような音を出す。京子の耳にはささやきかけてくるように聞える。もの悲しくさえなってくるのだ。

「午前中は出勤だったんだけど、やっと走ってきたの。」

うしろから誰かが大声で話しかけてきた。京子がふり向くと、

「あら、やまちゃんじゃなかったの。うしろ姿がよく似ているもんで、やまちゃんかと思った。」

と声をひそめずに言った。音の流れがそこでがさつに断たれたような気がする。水商売風に目立つのもいやなので、京子は白いブラウスに紺のスカートを着ていた。

二十分くらい過ぎると大きな音を立てて扉を開け閉めしながら、人々が入ってきた。折り畳みの椅子をわざとのように大きな音を立てて並べてゆく。大声で笑い合う。ピアノを聞くという姿勢の人は誰もいないし、ピアノを弾くうしろ姿に眼をくれようとする人もいない。ピアノとそれを弾いている人だけが、雑多な音の中で孤立し、別の時間を持っているようだ。

五十人ほどの人が集まっただろうか、話し声がますます高まってピアノの音が全く聞えなくなった頃、ピアノを弾いていた男がくると正面を向いた。

「集まりましたか。」

と聞いた。顔色はあまりよくないが、鼻筋が通っていてかなり整った顔立ちだ。その指揮者が友一であった。友一は立ち上ると「おはよう。」と言い皆もくちぐちに「おはようございます。」と言った。午後なのにそう言った。

指揮者が京子の倍の年はあるうかと思われるのでほんとと安心した。くたびれた顔をしてい

るので、京子はもう少し見ていようという気になった。団員の年齢は平均して二十一、二歳というところだろうか。夜ふかし商売の京子を実際の年齢より四つ五つ老けて見える。ひと廻りほど自分だけ年上だなと思いつながら、若い人たちと向き合って立っている指揮者が、さらにずっと年上であることで気持が楽になっていた。

楽譜を借りたので開いてみると、「今生れたばかりの川」と最初の詩が書いてある。山の中に生れた一滴のしずくが集まって、それが次第に大きな河の流れとなり、海に注いでゆくという詩であった。

伴奏者が前奏を弾きはじめた。友一は胸のあたりに手をやって待っている。指先が静かに動き出すと女の方から歌が聞えはじめる。友一の指先からいかにも一滴の水のしずくがこぼれ落ちるのではないかと思うほど、神経のこもった動き方だった。

京子は指揮というのを正面から見るのははじめてだった。小学校や中学校の音楽教師の指揮は、友一と較べると音頭とりだと思った。ただ棒を振っていただけだった。

京子は耳から入ってくるメロディと、友一の指先と、楽譜に書いてある詩の言葉とがどうつながるのだろうか、一生懸命に読み取ろうとしていた。

山奥の深い森の中の地面は苔と羊歯に覆われていつも湿っている。緑色の苔の面から緑色のしずくが垂れる。そのような詩の心を友一はどうかして皆に感じ取らせようとしてい

る。深い表情をしてやさしくうなずきながらその詩のところを指さしている。

緑色のしずくは集まって苔の表面をひと筋の糸のように流れはじめる。誰も見ている人はいない。陽の射さない深い森の中で川は生れようとしている。

友一の指が男の方を指すと、小川が山の斜面を下ってゆく場面になる。いつのまにか流れは谷を穿ち土を削って早瀬となる。男の声が早瀬の流れを唱えばそれに合流するように女の声が重なる。そして流れは成長してゆき、せき止めることのできない早さで、山のくぼにある沼に注ぎこむ。

沼には河童が遊んでいる。河童たちは澱んだ沼に注ぎ入る、冷たくて新しい水を飲もうと少し小川を遡って泳いでみる。臆病な河童たちは遠くへ行けない。沼から離れて少し遊ぶと肌になじんだ沼の水が恋しくなる。河童の遊びは女の声で調子を早く軽やかに唱っている。

男声と女声は溶け合されて次第に大きくなり、広い平野をゆったりと流れる大河を唱う。

友一は大きく両腕を振り上げ、皆が張り上げる声をどうにかして大河の感じにまとめようとしているらしい。そろそろ終りに近づいたらしく、友一は皆の上から押しかぶさるようにして腕を振り、声が寄り合って最も大きな響に高まったとき、拳を宙に浮かせて風を切るようにした。歌声はびったりと止った。

京子は眼をみはって呆然と立っていた。くたびれた年寄りだと思っていた友一の体が、ひ

とたび動き出すと指の先端までひらめくような体に変ってしまった。五十人もの人の声を指先一本であやつて、詩の言葉音楽を変えてしまった。

曲が終って汗を拭くと、友一は休憩と言つて皆を腰掛けさせた。

「新しい人を紹介します。きみ名前はなんと言うの。」

と京子の方を指さして聞いた。小さな声で名乗ると、

「という方だそうです。今日から団員の一人として仲好くして上げてください。」

と言った。

「楽譜も読めないし歌唱したことないし、それにみんなより十歳は年上だと思うし……。」

今聞いたばかりの歌に圧倒されて、京子はうつむいたままでそうつぶやいた。

「楽譜なんて、やってるうちに読めるようになる。音を感じればそれでいい。詩の心を表現しようとやわらかくなればいい。音を聞き取ろうと耳を澄ませるんだよ。」

「演歌くらいなら唱えますけど。」

「それでもいいんだよ。赤ん坊が嬉しいときききやと笑うだろう。悲しいときは大きな口開けて腹の中から声出して泣くだろう、あれでいいんだよ。唱うというのは自然なことなんだ。あんたは心の中に構えがあるからいじけてるんだ。構えを取ればすぐに声なんか出せるようになる。いじけるのが一番いけない。」

京子は今までこのような言葉を聞いたことがない。父が戦死して祖父母のもとに同居していた戦時中や、敗戦後母と二人で祖父母の家を出て以来の今日まで、およそ友一のような人と出会ったことはなかった。京子の体には男の指一本触れさせないまま過ぎてきた。店のカウンスター越しに客とやり合ったり、何度も誘いはかかるのだが、気持の動いた男は一人もなかった。京子には今日のはじめて友一の指先が、固く強張っている京子の体の一点に、かすかに爪を立てたことを感じていた。あの指先をもっとみつめていたいと思った。

それ以来京子は日曜日の午後、区民会館に通うのが楽しみになった。日曜の合唱のためにほかの曜日があるような気にさえる。

友一は戦前の音楽学校を出てオーボエを吹いていた。肺を悪くして肋骨を切り取る手術をしてから、オーボエが吹けなくなった。指揮の勉強をしながら高校の音楽教師になったが、途中からの転向だから大きなオーケストラや大きな合唱団の指揮など、させてもらえないはずがない。そのうちに高校を定年でやめて、自宅でピアノを教えながら生計を立てている。区民会館で教えるのも区役所からはわずかばかりの謝礼が出るだけのことらしい。

友一は指揮棒を持たない。自分の細くて長い指を存分に働かせて指揮棒以上の効果を出す。歌の出だしのとき、京子は友一が胸のあたりにかまえた指を一心にみつめる。この緊張した一瞬、京子は自分の体に友一の指先が突き刺さるような気分になる。ぴんと立てた人差

指の先が静かに静かに動き出す。

いつのまにか京子は、友一の指先一本で自分が思うままにあやつられていることに気がつく。友一が両腕を拡げて大きく振れば、京子は下腹に大きく息を吸いこんで自然に音量を大きくする。両腕をすぼめて指先だけをゆるやかに振れば、腹でしっかりと支えてかすかな音を響かせる。京子はきれいにハーモニーとなつて流れる音の中におり、友一の指先と自分とがしっかりとつながっていることを感じる。多勢の人間の声の重なりの中にいながら、友一の指先は京子一人を指さしているように思えてならない。

京子の頭の中に赤い灯が曲に乗って流れてゆく。あかあかと無数の灯が闇の中に光の洪水となつて音立てる。

静かに余韻を残して曲は終る。京子の体も興奮のあとのやさしい余韻の中にいる。

2

友一がものを言うとき、少し息切れがしているようだと京子は思った。このアパートにく

るまでの長い坂を、急いで登ってきたのだろうか。肩で大きな息をしているし、いつもより動悸の治まるのが遅い。

「体きつい。もっとゆっくり登ってくればいいのに。」

水を差し出しながら、京子は背中をさすりたくなった。そんなにあたしに会いたかったの、一刻も早くあたしの顔を見たかったのと言いたくなって、友一をじっとみつめた。友一は動悸を噛み殺すようにしながら、なにげない風を装っている。

友一が背広を脱ぎネクタイを弛め、ワイシャツのボタンを外す間、京子はうしろからじつと見ている。京子より頭一つ分だけ背が高い。肩巾は京子と同じくらいだろうか。女にしては骨太く節々の大きい京子の体形に較べて、友一は骨格のどこを拾っても特に目立つような大きい節はない。

それを見ているだけで京子ははっと安心する。友一の体付きが男にしては角張っていないだけに、男を感じさせる濃度が薄い。京子は友一を男として強く意識しないせいか、身構えがほどけてゆくのがよく分る。

友一の指は尖っていて力仕事など一度もしたことがないのだろう。指の根本から先端まで細くて長い線だ。爪は絵に描けるような楕円である。それは友一の体形に似つかわしく、友一の体の先端にあるべくしてあるという、指先のつくりだ。京子は友一の尖った人差指を口

の中に入れて、しゃぶりとくような衝動にかられる。口の中だけでなく、そこからずつと奥の、京子の体の最も深いところにその指を届かせて欲しいと思う。節の大きい骨太な自分の手を背中に廻し、京子はそつとうしろに隠す。

夕食のとき、友一は指をきれいに動かして箸を使う。指先で捌いた食べものは友一の口にちょうどよい大きさに千切られ、顎の内側に入れられる。その顎の骨も薄くて男の顎にしてはえらが見えない。

夕食が済むと二人とも同じほど酔いが廻ってくる。

「店の方、大丈夫なのかい。」

念のためと言うように友一が聞く。

「信ちゃんと留ちゃんに任せてあるの。今日は土曜日だし週休二日の会社が多いでしょ、だからお店は暇なのよ。」

京子は酔った眼で再び友一の指を見る。指が近付いてくるのを待っている。体が寄ってきて欲しいのではない。体を遠くに置いたまま友一の触覚だけ、京子の体に伸びて触って欲しい。二人の触覚のほかにはなにも要らない。友一の細くて長い指先は、京子の脚の指の先端から毛穴の一粒一粒をなぞってゆく。指で撫でられた毛穴は、それまで固く閉じて毛羽立っていたはずなのに、次々とゆるめられて開かれてゆく。